



文責：的場秀騎

令和6年11月24日（日）～30日（土）の期間に、ユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCU）主催、中国教育部の協力のもと、文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」の一環として「中国政府招へい教職員交流プログラム」（以下、中国プログラム）に参加してきました。

中国プログラムのテーマ及び目的は次のとおりです。

○ テーマ

「あたらしい学び」や「新時代に求められる教職員像」

○ 目的

- ・ 中国の教育事情に関する知識を得て中国に対する理解を深める
- ・ 学校間の連携のため、日中教職員間のネットワークを構築する
- ・ 日中教職員間で参加者がそれぞれの考えや教育実践を共有し、対話する機会を提供する



● 中国プログラムに参加した理由

蒲刈小学校の児童数は少しずつ減少し、令和6年度には36名となりました。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、主体的で対話的で深い学びの実現をめざしていますが、各学年の児童数が一桁になってくると、多様な考えを広げたり深めたりすることに対して困難な場面があると感じます。

児童数が少ないからこそ、一人一人に多様な考えや願いを形成させる必要性を全教職員が感じています。多様性をもつ「個」（児童）を育成するためには、多様性をもつ「異文化（異言語や異世代）の人々」との交流が、児童に「（教育目標）未来を拓く」資質能力を向上させる有効な機会となり得ると考えます。

近年訪日外国人の増加が見られるとともに、今後日本で生活・就労する外国人の増加が見込まれています。そのような社会において、言語や文化を超えて理解し合い、それが困難でも互いに理解し合おうとする「個」を一人でも多く育てる必要性を切実に感じています。

そこで、『「あたらしい」学び』や「新時代に求められる教職員像」をテーマにした今回のプログラムは、国際社会において互いに理解し合おうとする「個」（＝子ども）を育てる「個」（＝教職員自身）が、教育の重要性を再認識し、新たな試みを可能にする非常に価値ある機会であると考えたことから、今回の中国プログラムへ参加することにしました。

● 中国プログラムの主な活動

今年度の中国プログラムは、全国から23名の教職員（小・中・高）が集まり、次のような日程で実施されました。特に印象が残った場所について、紹介します。

1 中国教育部表敬訪問…日本の文部科学省にあたる場所を訪問し、中国の教育施策について説明を受け、質疑・応答を行いました。国家の在り方や課題は異なっていますが、具体的な考えや方法では共通点も見受けられました。



中国教育部訪問

2 北京影山学校訪問…北京市内にある小中一貫教育の大規模校。校舎内に入ると、児童生徒の絵・書を校内に展示されていました。児童生徒のための心理教室（サイコロジカルガイダンスルーム）等を見学した後、体育館で児童生徒による各演技（縄跳び体操・空手・テコンドー・合唱等）が披露され、特に合唱は館内に生徒の歌声が響き渡り、思わず涙した日本の教職員もいました。狭い運動場を効率的に活用して体力づくりをする姿が印象的でした。校内を歩いていると、笑顔を見せたり手を振ったりする子供もたくさんいました。



北京影山学校訪問

教職員用の休憩室には運動機器があったり、ソファや碁盤が置かれたりしていました。

3 文化施設(「天壇」)見学

4 西安電子科技大学訪問…日本の多くの大学と姉妹校を結び、留学生も世界から広く受け入れ、日本人の教授やスタッフもいました。AI や ICT を活用した学習管理システムで、講義内容を記録し、学生や指導者を分析し、学生の評価や指導者の講義改善に生かしていると説明を受けました。かつて、唐の都だった西安(長安)には、日本からも阿部仲麻呂や弘法大師(空海)が遣唐使船に乗って海を渡りました。また、インドから三蔵法師玄奘が持ち帰った仏教経典は今も西安の「大雁塔」に存在しています。



西安電子科技大学訪問

玄奘の記録は「西遊記」へと繋がります。そして、ドラゴンボール…

5 西安交通大学附属中・高等学校訪問…日本語を学ぶ高校生が西安市の様子や伝統料理、学校の特色などを日本語で紹介してくれました。日本の教職員と生徒との交流(やりとり)する時間があり、私が話した生徒は、日本のアニメや高校生活に興味をもっていました。

6 文化施設(兵馬俑博物館)見学

7 西安市第三中学校訪問…授業風景をじっくり観察できました。広い教室に整然と並んだ机。真剣に授業を受ける生徒。西安市内でもトップクラスの進学校と聞きました。中国では2020年代頃から教育改革として、児童生徒の宿題の負担を軽減したり、学校外教育訓練(所謂「民間学習塾」)を規制したりしています。また、「学校・家庭・社会」の三者が子供の教育を行う体制づくりを進めています。



西安市第三中学校訪問

● 中国プログラムを振り返って

1 本プログラムの目的について

- ・ 中国教育部や西安市教育委員会への訪問時に教育改革等の施策の説明を受けたり、学校訪問において学習環境や子供の姿を実際に観察したりすることで、中国の教育事情に関する知識を得て中国に対する理解を深めることができました。
- ・ 日本教職員交流団が進んで本プログラムに取り組み、LINE で連携するなど、教職員のネットワークを構築し、日中間のネットワークについて構築に向けた取組を始めています。
- ・ 日中教職員間で考えや教育実践を十分共有できたとは言えないが、多様性を認め合い、相互理解に向けたやりとりが交わされ、互いに肯定的態度が感じられました。

2 テーマ「あたらしい学び」及び「新時代に求められる教職員像」について

今後さらに AI や ICT 等を活用した新たな学び(手段)が導入されていくことが予想されます。取り組んでいる教育施策・授業の型や方法・「個」への手立て(方略)は似ていても、眼には見えず、耳には聞こえにくい価値や意義、目標といった「学びへの本質的な考え(問い)」を見失うことなく、学びを実践していくことが大切です。「未来を拓く」子どもたちに何を願い、何を伝える必要があるかを考え続ける教職員であることも重要です。「今を生きる」子ども達が、多様な人とつながり、学び続けようとする「個」へと変容するために、教職員自身が保護者や地域の方々と連携・協働しながらも、変化する社会とつながり自ら異文化(異言語・異世代)との相互理解を願い、社会教育等の場で自ら学び・高め続ける「個」でありたいと考え取り組む姿が、「新時代に求められる教職員像」と考えます。

このように考えたことを蒲刈小学校の教育活動に活用し、保護者や地域の方々、関連機関とともに連携・協働して「未来を拓く児童の育成」に向け、貢献したいと思います。今後ともご理解とご協力をよろしくお願いいたします。